

カード・ウィーヴィング、その深淵に触れる

Touching upon the charm and depth of Card Weaving

カード織作家：鈴木美幸



経糸がついたままの木製カード。ノルウェー9世紀。
(University Museum of Antiquities, Bygdøy)
THE TECHNIQUES OF TABLET WEAVING
by PETER COLLINGWOOD

その昔、カード・ウィーヴィングは、古代エジプト22代王朝（BC994～25）の墓から発掘された物を最古として、スカンジナビアのバイキングやヨーロッパ各地、そしてインドネシアやアジアなど、世界中の様々なところで紐を作るテクニクとして発達してきたという。9世紀のスウェーデンでは140枚のカードを手練った作品が記録されている。それは手綱、剣の紐、鞍紐、装飾用のプレード、祭壇の布の縁飾り、衣服の袖、裾、襟に、サッシュユベルトに使われ、イニシャルを織りこんだものもあった。

当時の人は、生活に必要なものを作るためとはいえ、こんなにも楽しいことを、日々の暮らしの中でしていたのか…今回は京都の鈴木美幸さんにその基本をご紹介します。

カードの束をばしゃばしゃと回転させると、縲糸を入れるとんとんと打ち込むはみ出た縲糸をピンと引っ張る。そしてまたカードを手練る…1つ1つのアクションが、手に心地よい。

模様がどんどん出来上がってくる、間違えたらすぐわかる。カードを前方（アウエー）に回転し、糸がひねれた分は、必ず後方（ホーム）に回転させる。

経糸をひねった分だけ、元に戻す…なんだか私の心と体のねじれを元に戻してくれるみたいで気持ちがいい。

1本1本の経糸は音符のように、カードを回す回数次第で、出来上がる模様が違ってくる。理屈がわかってくると、ピアノを弾くように様々な文様を作り出せるのかもしれない。

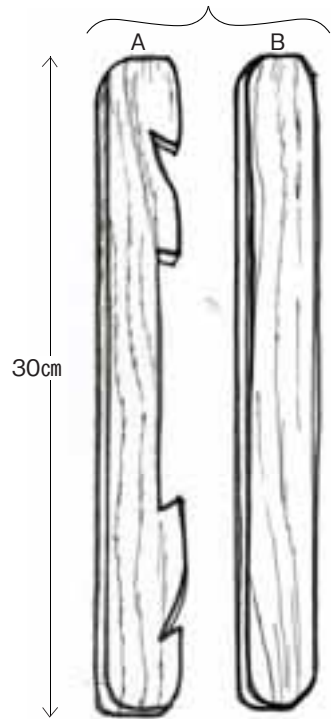
カードの紙と糸、それに簡単な巻き取り用の板2枚、腰で引っ張るための帯紐、それだけあれば無限に広がる世界。

カード織りに必要な道具はたったこれだけ!!

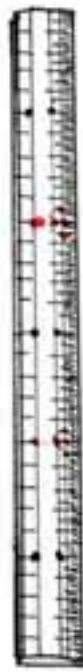
12枚のカードで無限の世界が広がります。

The necessary tools for Card Weaving are just these!!
A limitless world expands with 12 cards.

●巻き取り板 2本でセット
winding wood piece (set of 2)

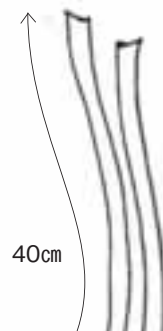


●とうひ 刀杼 ものさしは緯糸を打ち込む杼のかわりに使う。
Beater (wooden ruler is used instead to push down the warp yarn)

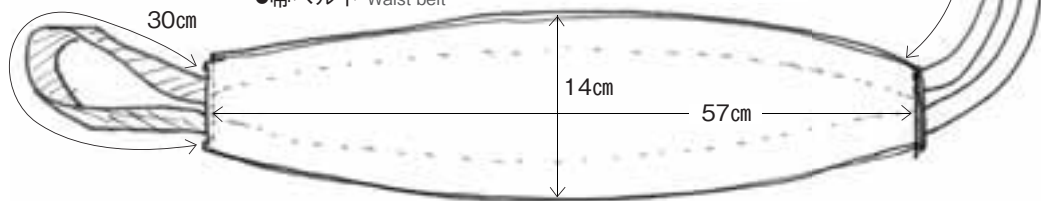


●経(タテ)糸
糸は伸び縮みの少ない糸を選ぶ。また、あまり燃りのきつくかかっていない糸で上燃りは甘い方がいい。
Warp yarn (choose a thread that does not stretch or shrink, or with a strong twist, preferably one with a mild twist of the top strand) .

●緯(ヨコ)糸を巻くボビン
Bobbin for winding the Weft yarn



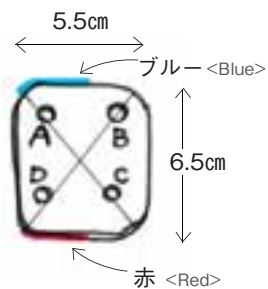
●帯ベルト Waist belt



●カード×12枚

厚手のケント紙 (6.5×5.5cm)を2枚あわせて、4隅に穴をあけ上下左側に違う色を塗っておく。12枚で1セット。

Card x 12 cards or more (thick Kent paper 6.5 x 5.5cm, double layered)
Create 4 holes, coding top and bottom left corners with different color
12 cards make 1 set



必要な道具はたったこれだけ。コンパクトに片付けられます。



The basis of my work is like gleaning all the gathered threads,
And I am excited when thinking about which weaving technique would make the greatest use of them.

私の作品の根底にあるものは
落ち穂拾いのように集まってきた糸
それを、どのテクニックで織れば

最大限に生かされるかを考えるとワクワクします

Translator: George Nakahara

鈴木 美幸

私の作品の根底にあるものは「落ち穂拾い」です。それは拾って来たベットボトルでみごとにシャンデリアを作るとか。最初に見本を作った糸は泉州の絨毯の残糸を友達から貰いました。壁に掛けてあった赤いタペストリーは吉岡先生の所の糸で、まったく売れずあげるわ、で頂きました。前頁の青の紐シリーズはナンダカンダと言って、世界の毛糸マズザキヤのバーゲン、AVRILの見切り品の糸、頂いた糸、手作り市で見つけた糸、もう機織りを辞めるからと言う事で安く譲って頂いた糸、などなどです。そのほうが独自性がでるかな、と思ってます。

この糸は、どのテクニックで織れば最大限に活かされるだろう、と考えるとワクワクします。この糸集めがケッコウ大変。また、楽しい糸の情報がありましたら教えてください。